

書 評

済生会横浜市東部病院小児肝臓消化器科 編

小児臨床肝臓学

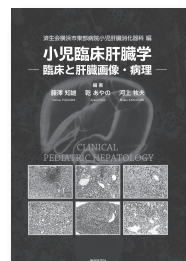
— 臨床と肝臓画像・病理 —

編 著：藤澤知雄／乾あやの／河上牧夫

<評 者>

熊本大学大学院生命科学研究部消化器内科学教授

佐々木 裕



このたび「小児臨床肝臓学—臨床と肝臓画像・病理」が東京医学社より上梓された。2011年3月から済生会横浜市東部病院で開催されている臨床・病理カンファレンスが2017年1月で200回目という節目を迎えたことを機に、コアメンバーがカンファレンスの症例をもとに作成したテキストである。CT、MRI、エコーなどの画像所見や鮮明な病理所見が随所にちりばめられ、各項目の内容が最初にkey pointにまとめられており、読みやすさ、使いやすさに重きを置いて企画された1冊である。

総論では肝臓の発生学、解剖学、病理学などの基礎的な内容に加え、診断確定に必要な肝生検の手技や肝組織の染色法、腹部超音波検査、内視鏡的逆行性胆管膵管造影という臨床に直結した内容にも触れており、肝臓についての基本的な理解をもとに画像を評価したり肝組織サンプルの検鏡を行うことの必要性、重要性が伝わってくる。さらに「どのような症状より肝疾患を疑うのか？」という項を皮切りに、小児科領域で頻度の高い肝腫大、黄疸、皮膚掻痒感などの症状を、カンファレンスでの症例を織り混ぜながら解説されており、理論と実際が同時に学べるという点も本書の特徴である。

一方、各論では新生児～乳幼児に胆汁うっ滞をきたす疾患、代謝性肝疾患、発生異常に基づく肝疾患に豊富な解説がなされており、加えてウイルス性肝疾患、薬剤性肝疾患、自己免疫性肝疾患についても、小児肝臓病領域の特殊性と成人の肝臓病との共通性を含めて詳説されている。なかでもB型肝炎ウイルスの母子感染予防や、将来のユニバーサルワクチネーションを目指したB型肝炎ウイルスワクチンの定期接種についての記述は、小児肝臓学に焦点を当てた本書ならではの内容である。

本書は、小児肝臓学の第一人者である藤澤知雄先生と、師弟関係(?)にある乾あやの先生、ならびにこの二人を支えてきた病理医である河上牧夫先生という3人が揃って、長年に及ぶ病理と臨床のコラボレーションにより生まれた産物であり、理論と実践の両面から小児肝臓病を学ぼうと最適な成書である。小児肝臓病を自身のサブスペシャリティと考える小児科専門医のみならず、肝臓専門医や移植外科医にもお勧めしたい一冊である。

A4判 336頁 定価9,720円(税込)
東京医学社 2017年4月刊